



博士（人間科学）学位論文 概要書

満州国・建国大学に於ける武道教育

-- その実態と教育力

The Actual Conditions and Educational Strength of
Budo Education at Kenkoku University in Manchukuo

2003年4月

早稲田大学大学院人間科学研究科

志々田 文明

Shishida, Fumiaki

武道は、一方で柔道や剣道のようにスポーツ種目の一種として他方でそれらを武道の範疇によって位置づけられてきたが、武道の独自性とは何か。そうした問題意識から、本研究では、傀儡国家といわれる満洲国の首都新京（現中国長春）にあった建国大学（1938-1945に存在、以下建大）を舞台に展開された武道教育の実態を解明し、そこで発揮された武道の「教育力」を歴史的に考察することを狙いとする。

建大は関東軍参謀であった石原莞爾のアジア大学構想から出発し、石原独自の満洲国構想と国民精神文化研究所のメンバーであった平泉澄、寛克彦、作田荘一ら四博士の思想などが融合する形で創られた。満洲国学の創生を目指して日本語によって日本の教育を施すものであり、他方で満州在住の諸民族の協和の実践が掲げられ、民族共塾の日々の生活の中で実施されるように仕組まれた。日中が戦争状態に入った軍国主義の時代において、この大学には当時では破格といえる読書の自由が実現され各民族は学内で全く平等に扱われた。

建大では、日本、中国、台湾、朝鮮、蒙古、白系ロシア等の諸民族を対象に、前期（予科）三年間剣道、柔道のほか内地日本でも全く新興武道であった合気武道が必修で、後期はこれらとその他の武道のうち一が選択される形で実施された。さらに弓道、銃剣道、騎道、角力を含めて、授業及び課外活動として活発に行われた。各武道の特徴をごく簡潔に表現すると次のようになる。

- ・ 剣道 -- 練武・堂々
- ・ 柔道 -- ・闘志・自主・自律
- ・ 合気武道 -- 非合理主義から合理主義へ
- ・ 弓道 -- 身心合一・正射必中
- ・ 銃剣道 -- 将校の銃剣道
- ・ 騎道 -- 民族協和する馬上禅
- ・ 角力 -- 人格涵養としての角力

剣道では試合、基本稽古いずれに於ても「堂々たる」態度で武を練ることが求められた。闘志は建大の武道訓練に期待された鋭気に通ずるものであり、柔道を行う際には必須の精神であった。自主・自律はその前提であろう。これも武道修業の一般的態度といってよいものである。合気武道に対して富木が行った説明の「合理性」は、他の武道においては既に確立されており、その意味では全ての武道に通底する常識的な思想であった。富木はこの新興武道を理解させるために技法の合理的分析と教育法の確立に努めつつ、徹底した形の稽古を学生に求めそのシステムを形成していった。合理的思索と形の反復稽古の要請が彼の指導であった。弓道の「正射必中」は「身心合一」した正しい型の修練が「必中」という結果を生むのだということを示している。これもまた正しい形の反復要請である。銃剣道における「将校」の意味は、主に下士官の武道であった銃剣道を、将来の指導者である建大生に実施するに際し将校的品位を求めて、堂々たる稽古態度を示したものと見える。そのような振る舞いは建大生すべてに期待されていることでもあった。騎道のリーダーが求めた「民族協和」は、建大生が日々実践を求められた課題である。それを明示することによって学生が個人的解脱にとどまり、小乗的閉鎖性に陥るのをいさめた。ややもすると日本の遊戯ととらえられる相撲は、武道として、あるいは修養道＝人格涵養の道・

角力として行われることが期待された。騎道、角力、いずれも修業における態度である。以上、建大の武道教育の特徴をさらにまとめて整理すれば、

- a. 個人的態度としての、「堂々」「闘志」「自主自律」
- b. 修業態度としての「身心合一」「練武」「形の反復」
- c. 目的としての「人格の涵養＝精神の修養」
- d. 建大独自の課題としての「民族協和」

の四点になる。cはそのまま先に見た武道構造における修行であろう。建大の武道は、「人格の涵養」と「民族協和」を如何にして実践していくかを課題とし、特に日本人学生において、様々な悩みもがいた実践であった。日本人は、建大武道の精神といえる「堂々たる態度」、その後ろに潜在する「精神の修養」＝「日本精神の体得」をおおむね模範的に理解したと思われる。しかし異民族の場合は異なった。台湾の学生は武道の精神修養性の指導を正しく評価し、ある中国人学生は、「堅強なる意志力と実践的体力と魄力」の点で評価した。しかし別の中国人は道的なものに危険性を感じて武道を忌避した。ある一期生中国人学生が中国人が置かれていた弱者の立場を切々と語ったように、日本武道の特色といえる精神の修養という教育力は中国人学生の間には基本的に機能しなかった。そこから学ぶべきことは他民族に自己の価値観を押しつけないことにつきる。それは立場をかえて考える他者感覚の彫琢に武道実践者・指導者が深く思いを致すことに他ならない。広く諸民族の歴史と文化を学び、自己と自文化を相対化した上で日本武道の発揮すべき独自性と教育力を再考する必要があるだろう